



2018年度（第14回）こども環境学会賞の発表

2019年3月30日

顕彰委員会委員長 高木真人

論文・著作賞選考委員長 高橋勝

デザイン賞選考委員長 石井賢俊

活動賞選考委員長 神谷明宏

自治体施策選考委員長 宮本照嗣

2018年6月より公募致しましたこども環境学会の学会賞につきましては、2018年10月末までに論文・著作賞10件、デザイン賞17件、活動賞7件、自治体施策賞3件のご応募をいただきました。

選考委員による厳正な審査の結果、論文・著作賞1件、論文・著作奨励賞2件、デザイン賞2件、デザイン奨励賞5件、活動賞1件、活動奨励賞2件、自治体施策賞1件、自治体施策奨励賞2件、以上合計16件が選定されました。

受賞者および講評は以下の通りです。（順不同）

こども環境・論文・著作賞

《論文・著作賞》

高橋節子（お茶の水女子大学）

「幼児教育のための空間デザイン モンテッソーリ教育における建築・設備・家具・道具」

《論文・著作奨励賞》

畑千鶴乃（鳥取大学）、大谷由紀子、菊池幸工

「子どもの権利最前線、カナダ・オンタリオ州の挑戦 子どもの声を聴くコミュニティハブとアドボカシー事務所」

《論文・著作奨励賞》

小谷正登（関西学院大学）、加島ゆう子、塩山利枝、木田重果、岩崎久志、三宅靖子、下村明子、来栖清美、白石大介

「小学生における睡眠健康教育の効果に関する研究 睡眠習慣改善の実践による心の健康状態の変化」

こども環境・デザイン賞

《デザイン賞》

井出敦史（sum design）、加藤克彦（テンジnstudio）

「川和保育園」（神奈川県横浜市）

《デザイン賞》

手塚貴晴＋手塚由比（手塚建築研究所）、大野博史（オーノ JAPAN）
「むく保育園」（静岡県富士市）

《デザイン奨励賞》

細谷功（スタジオ 4 設計）
「すみれ幼稚園」（千葉県柏市）

《デザイン奨励賞》

慶野正司（アトリエ慶野正司一級建築士事務所）
「すみれ乳児院」（栃木県小山市）

《デザイン奨励賞》

伊藤立平（伊藤立平建築設計事務所）、近藤友宏
「長門おもちゃ美術館」（山口県長門市）

《デザイン奨励賞》

石川恭温（石川恭温アトリエ一級建築士事務所）
「尾山台みどり保育園」（東京都世田谷区）

《デザイン奨励賞》

藤村龍至（アール・エフ・エー）、林田俊二
「すばる保育園」（福岡県小郡市）

こども環境・活動賞

《活動賞》

榎陽子（学校法人明晴学園）、森田明、澤村和哉、小野広祐、玉田雅己
「明晴学園 10 年の歩み こどもが学校を創る」

《活動奨励賞》

三國隆子（東京立正短期大学）
「商店街の可能性を開く 子育て力・親育て力・地域育て力」

《活動奨励賞》

清水日香里（酪農学園大学）
「学生主体による大学不在地域における地域連携型実践的環境教育」

こども環境・自治体施策賞

《自治体施策賞》

長野県
「信州型自然保育（信州やまほいく）認定制度」

《自治体施策奨励賞》

岩見沢市（北海道）

「あそびの広場を核とした「えみふる」の子育て支援とソーシャルワーク・システム」

≪自治体施策奨励賞≫

秩父別町（北海道）

「こどもの遊び場づくりの大胆な展開」

以上が受賞されたものですが、選考に漏れた方々におかれましても受賞者に劣らないすぐれた学術活動や実践活動であることを申し添えますとともに、さらに一層の活躍を祈念いたします。また更に多くの会員の皆様が次回の学会賞に応募されますことを期待いたします。

【各賞の対象と審査委員】

(1) こども環境論文・著作賞

近年中に完成し発表された研究論文および著作出版物であって、こども環境学の進歩に寄与する優れたもの。

選考委員：

委員長：高橋勝（横浜国立大学名誉教授・教育哲学）

委員：織田正昭（福島学院大学教授・国際保健）、河原啓二（福島県県南保健福祉事務所所長・保健）、住田正樹（放送大学名誉教授・発達社会学）、仙田満（東京工業大学名誉教授・環境建築学）、福岡孝純（日本女子体育大学招聘教授・スポーツ環境）、矢田努（愛知産業大学教授・建築学）

(2) こども環境デザイン賞

近年中にデザインされた環境作品（建築・ランドスケープ・インテリア・遊具・家具・グラフィックその他）であり、こども環境学的見地からも高い水準が認められる独創的なもので、子どもの成育に資することが認められるすぐれた環境デザイン。

選考委員：

委員長：石井賢俊（NIDO・プロダクトデザイン）

委員：佐久間治（九州工業大学教授・建築学）、手塚由比（手塚建築研究所・建築デザイン）、小池孝子（東京家政学院大学准教授・住居計画学）、鮫島良一（鶴見大学短期大学部講師、同附属幼稚園園長・彫刻家）、竹原義二（摂南大学教授・無有建築工房・建築家）、千代章一郎（広島大学准教授、建築学）、福岡孝純（日本女子体育大学招聘教授・スポーツ環境）、松本直司（名古屋工業大学名誉教授・建築学）

(3) こども環境活動賞

こども環境に寄与する、上記以外の活動（施設運営・行政施策・社会活動・その他）であって、近年中に完成した業績および継続的な活動によってその成果が認められた活動。

選考委員：

委員長：神谷明宏（聖徳大学准教授・児童学）

委員：井上美智子（大阪大谷大学教授・幼児教育）、北方美穂（日本フィンランド協会事業推進委員）、木下勇（千葉大学大学院教授）、小澤紀美子（東京学芸大学名誉教授・住環境教育、まちづくり教育）、四釜喜愛（食と森の保育園しかま副園長・幼児教育）、新田新一郎（(有)プランニング開）、吉永真理（昭和薬科大学教授・発達心理）

(4) こども環境自治体施策賞

こども環境に寄与する行政施策であって、近年に完成、完了した施策、若しくは継続中の施策でその成果が認められるもの、又は近年に着手された施策で、顕著な成果が生じ始めていると認められるもの。

選考委員：

委員長：宮本照嗣（市民参加まちづくりパートナー）

委員：五十嵐隆（国立成育医療研究センター理事長）、佐久間治（九州工業大学教授・建築学）、高木真人（京都工芸繊維大学准教授・建築学）、中島興世（子育てと教育を考える首長の会事務局長）、三輪律江（横浜市立大学学術院准教授）、松本直司（名古屋工業大学名誉教授・建築学）、河原啓二（福島県南保健福祉事務所所長・保健）

こども環境・論文・著作賞

〈総評〉

今回の応募は、著作3編、論文7編の合計10編である。昨年度の応募総数が9編であったことを考え合わせると、ここ数年は、10編前後の応募が続いていることがわかる。本学会での学術面での活発な活動と成果が途切れることなく見られることは、大変喜ばしいことである。10編の著作・論文を、7名の選考委員全員に7～8編ずつ査読してもらい、10点満点で採点した結果とその詳細なコメントを提出して頂いた。さらに一堂に会した選考委員会を開催し、厳正かつ率直な意見交換を行った上で、下記のように論文著作賞1編と奨励賞2編を選出した。

今回の応募作品10編の研究テーマを見ると、①幼児教育のための空間デザイン、②カナダ、オンタリオ州における子どもの声を聴くコミュニティ・ハブの実践報告、③小学生における睡眠教育の効果、④ゴム跳び遊びを取り入れた休み時間の活動が小学生の運動意識に及ぼす影響、⑤重度障害児の排泄実態と排泄環境整備など、子どもにかかわる多様な問題が取り上げられ、多面的に照射され、考察されていることがわかる。毎年感じることはあるが、こうした研究テーマの多面性には、子どもの成育環境をめぐる領域横断的な研究と実践を強力に推進してきた本学会の特長がよく表されているといえる。

（論文・著作賞選考委員長 高橋勝）

《論文・著作賞》

高橋節子（お茶の水女子大学）

「幼児教育のための空間デザイン モンテッソーリ教育における建築・設備・家具・道具」

本書は、イタリアの著名な教育者であるM.モンテッソーリの幼児教育思想を、建築、家具、道具などの物的空間配置を中心に考察したもので、幼児の自己活動重視の考え方が、どのように空間デザインとして具体化されているのかを、文献のみならず、ドイツのゲーテ・ホーフの市営幼稚園での調査等を通して明らかにしたものである。これまで、モンテッソーリの幼児教育思想については多くの先行研究があるが、その思想を、建築学や子ども環境学の視点から一貫して考察した先行研究は見当たらない。本書は、お茶の水女子大学に提出された学位論文であり、幼児教育思想と建築学、遊び空間論を領域横断的に融合させて掘り下げた研究で、これからの子ども環境学の豊かな可能性を開示して見せた力作である。研究分野の異なる選考査読者の全員が、それぞれの査読対象の中では本書に最高得点を与えていることから、本書のレベルの高さをうかがい知ることができる。以上の理由により、選考委員会では、全委員一致のもとに本書を論文著作賞に決定した。

（高橋 勝）

《論文・著作奨励賞》

畑千鶴乃（鳥取大学）、大谷由紀子、菊池幸工

「子どもの権利最前線、カナダ・オンタリオ州の挑戦 子どもの声を聴くコミュニティハブとアドボカシー事務所」

本書は、言語も文化も多種多様なカナダにおいて、子育てしやすいまちづくりを進めているオンタリオ州トロント市及びハミルトン市での現地調査をもとに、州と両市の政策動向、コミュニティハブでの実践、オンタリオ州アドボカシー事務所の取り組み等を具体的に紹介したものである。日本では、ほとんど知られていないカナダにおける先進的な地域子育て支援の取り組み事例が多数わかりやすく報告されている。それに加えて、経済のグローバル化に伴って、多くの外国籍の人々とその子どもが日本に移住して生活し、学んでいくことが予想されるこれからの多文化共生社会における子育てのあり方を考える上でも、非常に参考になる文献であり、奨励賞に十分値すると判断した。

（高橋 勝）

《論文・著作奨励賞》

小谷正登（関西学院大学）、加島ゆう子、塩山利枝、木田重果、岩崎久志、三宅靖子、下村明子、来栖清美、白石大介

「小学生における睡眠健康教育の効果に関する研究 睡眠習慣改善の実践による心の健康状態の変化」

本論文は、公立小学校4校で、小学3年～6年を対象に、「睡眠健康教育」の授業を行い、受講者へのアンケート調査の結果（有効回答1,357名）、得られた回答を分析して、授業の前後で、児童にどのような変化が見られたのかを明らかにしたものである。結論として、「睡眠教育」の有無によって、子どもの睡眠に対する態度に大きな違いが生じることが明らかにされている。厳密な実証的方法によって導き出された本研究は、小学生の睡眠という、ともすれば見逃されがちな健康教育の大切さを説得力のある仕方でも説明している。SNSやネット上のゲームに多くの時間が取られる傾向にある日本の子どもたちの睡眠時間が、他の先進諸国の子どもに比べて少ないという別の調査結果も考え合わせると、本研究の提起した問題の意義は大きいと考え、奨励賞に十分値すると判断した。

（高橋 勝）

こども環境・デザイン賞

＜総評＞

こども環境学会デザイン賞は子どもの視点に立つ建築、造園、遊具、プロダクト、絵本、グラフィックス等さまざまなデザイン領域から優秀なデザイン作品を表彰するものである。14回目のデザイン賞である今年度は9名の審査委員がデザイン審査に当たって打ち合わせた10の視点を共有しつつ厳密な審査を行った。

応募作品18点から、まず書類審査で9点を選出して複数の審査委員による現地審査および作者と施設ユーザーからのヒアリングを実施した。その報告書を基に審査委員合同による検討審査会を行い、デザイン賞2点、奨励賞5点を決定した。

今年度の応募作もデザインレベルが高く、各々の作者がこどもの視点に立った質の高い環境デザインを構築していた。本デザイン賞審査委員は、環境建築学、住居学、建築家、スポーツ環境学、保育専門家、プロダクトデザインなど多様な領域の専門家によって構成されているが、今回の最終審査会においても審査委員各自の視点からの活発な討議をもとに適確な選考が出来た。

デザイン賞、奨励賞を獲得なさった作者に敬意を表し今後の活躍を期待するとともに、本デザイン賞に応募および推薦をしてくださった皆様に深く感謝したい。あわせて広範囲なこども環境デザインに関わっておられる方々の本デザイン賞への挑戦を切にお願いしたい。

（デザイン賞選考委員長 石井賢俊）

《デザイン賞》

井出敦史 (sum design)、加藤克彦 (テンジンスタジオ)

「川和保育園」(神奈川県横浜市)

横浜市にある川和保育園の移転建替である。何より園庭が素晴らしい。旧園舎の園庭も素晴らしかったようであるが、その雰囲気がかちんと引き継がれている。園庭には中央の土が小高くなった部分を中心として、木で出来た手作り感あふれる遊具が散りばめられている。園庭を取り巻く山の斜面にも遊具や、ハンモック、小屋などが点在し、そこを子供達が自由に駆け回っている。園庭には屋外用の遊具だけでなく、靴を脱いであがって本を読めるスペース、こまを回して遊べるスペース、着替えのスペースなど普通であれば室内での活動になるものまで用意されている。園庭の周りには水路が巡らされ、冬でも水遊び出来る場が用意されていた。この保育園では1日の9割以上の時間を園庭で過ごすという。園庭では子供達が非常にパワフルに思い思いに遊んでいる姿を見ることが出来て非常に印象的であった。園舎は森を背にして、3棟に分節され、階段室を兼ねたホールで繋がっている。園庭を囲むように配置された園舎を一周するように外廊下が設けられ、すべての教室から直接園庭に出られるようになっている。外廊下は園庭だけでなく、屋上や南側斜面にも繋がり、子供達の遊びの可能性を広げている。子供達は園舎や園庭を回遊しながら遊び尽くすことであろう。自然と建物が一体となった園として、こども環境学会デザイン賞にふさわしい作品である。

(手塚由比)

《デザイン賞》

手塚貴晴+手塚由比 (手塚建築研究所)、大野博史 (オーノ JAPAN)

「むく保育園」(静岡県富士市)

むく保育園は弁当を作る会社の企業主導型保育園で、富士山麓の丘陵地に敷地面積5487, 99㎡ 建築面積537, 19㎡として昨年冬に建てられた。銀色の傘型の屋根を持つ12棟のシャボン玉のような保育室や調理室が楽しげに連系している。各シャボン玉保育室の直径は約10m、8m、6m、5m、3m、2mである。保育室は基本的に単機能で、多目的遊戯室、乳児室、2歳児室、積み上がりのこどもをリカバリーできる小さな保育室もある。保育室の天井は木造片持ち梁のもたせ合い構造で、壁面を透明強化ガラスとしてある。中央に柱が無い家具やトイレコーナー以外は360度見通しが良く、保育者の目も届きやすい。床暖房の桐材はこどもの肌と足底に優しい。この透明な保育室の外周を回遊性の連絡路としている。こどもたちはこの大小に組み合わせられた屋外の回廊を多様に遊びまわり、自然との触れ合いも深まる。浅いすり鉢状をして噴水機能をもつ遊具も建築と調和して幼児の遊びを誘導している。

この保育室内でこどもの視線レベルに座ってみると開放的なリラックス感に満たされることが分かる。空に向かって膨らもうとする天井、円周状の透明壁、優しい床の感触、ほどよい採光とスケール感などが調和して副交感神経優位の空間を形成している。こどもたちは毎日、このリラックス感を心の基盤とすることで積極的に自主的活動を展開していくことが出来るであろう。私はこのようにこどもの視点に立脚した保育空間を美しく造形化した作者の創造力を高く評価したい。今後計画されているこども数の増加と年長児の加入に対してもシャボン玉保育室はフレキシブルに対応して増設できる。そしてこどもたちの運動的遊びがより活発化していく故に回遊式通路に円周状に点在して傘屋根を支えている上向きV字形の柱の安全化対策は必須であると思う。今後の本園らしい成長を期待したい。

(石井賢俊)

《デザイン奨励賞》

細谷功 (スタジオ4設計)

「すみれ幼稚園」(千葉県柏市)

本園の第一の特色は、広い樹木ゆたかな敷地(5572.37㎡)が確保されていることである。

建物を活かす為には広いオープンスペースが必要であるが、本物件はその前提条件を満たしている。しかし周辺は閑静な住宅地なので、これに配慮する必要がある。これらを考慮し、円環状の低層

木構造の園舎が作られた。建屋の延床面積は 1991.09 m²である。管理部門を中心にシステムの、機能的にレイアウトされている。回遊できるランドバルコニーにより樹木ゆたかなオープンスペースの広い眺望、視野が確保されている。施設はアメニティーゆたかなユニバーサルデザインとなっていて、一見平凡のようだが随所にきめ細かい工夫が見られる。また、スケールの大きな幼稚園ながら巨大さを感じさせない居心地の良いつくりとなっている。

運用や維持管理のソフトウェア、幼児をケアするヒューマンウェアにおいてもよく工夫されている。ベテランの園長のもと良い人間関係が保たれているのは好ましい。これらのことを総合的に判断し、本物件を奨励賞に値すると判断した。

(福岡孝純)

《デザイン奨励賞》

慶野正司（アトリエ慶野正司一級建築士事務所）

「すみれ乳児院」（栃木県小山市）

栃木県小山市の低層住宅地に位置する「乳児院」施設である。こうした施設は無機質な病院のような建物になりがちであるが、「寄り添い支え合って暮らすイエづくり」を基本コンセプトとし、小さな家の集合体として建物を設計したことにより、「施設」を子どもや子どもを支える大人の拠り所となる「家」として再定義することに成功している。家ごとに小さな中庭があり、各家がぐるりと中庭を囲み、各所に自然光が入り風通しも良くかつ温かみもある。開放的な心地よさと建物に守られている安心感、使い心地の良さなどバランスがとれている。様々な事情で孤独を強いられる子どもたちを支える施設に、デザインという光を当てた意義ある取り組みであり、ここで過ごす子どもやスタッフの気持ちを優しく明るくし、近隣住民の偏見を和らげることに成功している。

(鮫島良一)

《デザイン奨励賞》

伊藤立平（伊藤立平建築設計事務所）、近藤友宏

「長門おもちゃ美術館」（山口県長門市）

本美術館の最大の魅力は、運営する NPO 法人、建築家、長門市、地元業者が一体となり、地元の木材を活かしたひとつづくり・ものづくり・まちづくりとしてこの事業を実現していることである。

躯体そのものは鉄骨建築物のリノベーションであるが、室内の展示空間、外壁、さらにデッキにも地場木材が一貫して使用されている。造形的にも青海島や赤崎神社の楽棧敷をモチーフとし、この場所ではじめて可能な建築造形表現を試みている点も評価できる。また、こどもの視線を計算して、常緑樹の茂る山並みと仙崎港の海の風景のコントラストを室内構成によって演出するなど、道の駅の単なるイベント空間に陥ることを避ける仕掛けが随所に巡らされている。

ただし、木造のファサードのハリボテ感是否めず、展示空間の木材のディテールも精度がやや甘い。既存鉄骨のスケルトンに木材を調和的に組み込むことの難しさであろうか。

また、「木育ひろば」や「うみのひろば」と名付けられた野外空間と美術館の内部空間とのつながりが乏しく、木製のおもちゃで遊ばせる場所が、事業者たちが意図する「木育」の仕掛け作りに結びついていないかどうか疑問が残る。しかし今後時間をかけて成長を遂げるポテンシャルを十分に備えた建築である。こどもたちが十全に五感を発揮でき、そのことによって真に土地に馴染むような、これからの新しい美術館として成長し続けていくことに大いに期待したい。

(千代章一郎)

《デザイン奨励賞》

石川恭温（石川恭温アトリエ一級建築士事務所）

「尾山台みどり保育園」（東京都世田谷区）

都心の住宅地に位置するこの保育園は、その姿を「見せる」ことによって周囲との関係性を築くことを目指した。園庭は地盤面から3階に続く芝生の坂道となり、滑り台を介して回遊性のある立体園庭を形成している。植えられた果樹はその花や果実、飛来する虫などでこどもたちの関心を惹き付け

ている。芝生のスケールは保育園の園庭というには狭いが、自宅の庭で遊ぶという体験がほとんどない子どもたちには、駆け回ったり寝転がったりという日常生活の中の寛いだ遊びの場として貴重なものである。

個性ある外観の園舎は、立体園庭で子どもたちが遊ぶ姿を近隣に見せるデザインとなっているが、道路と園庭とのレベル差により適度な距離感がつくられており、まさに開かれた保育園というイメージとともに子どもたちの元気な様子を伝えることに成功している。

東南の角地に建てられた園舎の南側からは明るい日光が差し込んでいる。北側の室は、将来隣地にマンション等が建設されることを見越して設けられたハイサイドライトから入る柔らかい光があたたかな明るさをもたらしている。

都市化の進んだ住宅地における限られた敷地条件のもとで、まちとの共存を図り、子どもが自然と親しむための工夫が凝らされた施設として評価できる。

(小池孝子)

〈デザイン奨励賞〉

藤村龍至（アール・エフ・エー）、林田俊二

「すばる保育園」（福岡県小郡市）

福岡県小郡市の郊外に建つ保育園である。敷地は北側に住宅地、東南側に水田が広がり、西側からは神社の鎮守の森が覆い被さっている。保育園としては理想的な環境を持った場所だ。

水平に広がる田園地帯において、形態の拠り所をどうするか。アルゴリズムックデザインによって決定したと建築家は説明する。その結果、周辺の環境と重なり一体となった建築が生まれていることは評価できる。しかし、外部空間の園庭と内部空間の保育室との繋がり希薄に見えた。特に3・4・5歳児の保育室は、縦割りの1室空間となっており、さらに開口部を介さない換気システムを採用しているため、子どもたちの声が室内に響き渡っていた。建築としては豊かに構成されているが、子どもたちの遊ぶという行為が制限されているような印象を受けた。この地域は黄砂の影響があるので窓を開けないで空気をコントロールしているらしい。しかし、季節の良い日は窓を開け閉めしたいものだ。

一方、園庭はものが無く寂しい感じがしたがヒアリングをすると外遊びを積極的に取り入れている様子であり、これから時間をかけて充実させるということ聞き安心した。

建築として新しい空間性と象徴性が実現されている点が評価できる。

(竹原義二)

こども環境・活動賞

〈総評〉

本年度は活動賞への応募総数が7件と、昨年度より若干増えたとはいえ、依然少ない候補についての審査となりました。その結果、以下にご紹介をいたしますように活動賞1件・奨励賞2件という審査結果となりました。応募作品の概要を申し上げますと、一昨年度と昨年度にご指摘させていただいた、一過性のイベント的な活動や大学の科研費を用いたその場だけの活動が減少し、大学の研究費を活用した活動であっても地域との深い連携が見られ、明確なエビデンスを示す努力が垣間見られる継続性のある先駆的な活動についての応募が増加しました。また、新しい試みに挑戦しているとは言えないまでも、その萌芽が見受けられる活動の応募が見られたことは顕著な変化といえると思います。

選考委員会では新たに実践的な活動を展開している組織・団体の主活動や発表の時期と応募期間との重複を避け、新たな応募期間を設けましたので、今回の応募を迷って見送られた皆さまの活動につきましても、積極的に挑戦していただきたいと思っております。

(活動賞選考委員長 神谷明宏)

《活動賞》

榎 陽子（学校法人明晴学園）、森田明、澤村和哉、小野広祐、玉田雅己

「明晴学園 10 年の歩み こどもが学校を創る」

現行の制度を超え、今までにない教育の場を創造する活動が容易ではない道のりであったことでしょう。しかし、この記録からはその困難さえも楽しみに変えてきたエネルギーを感じることができます。その原動力になっているのは、義務教育という場でありながらも“子ども主体“という教育の本質を自らに問いかけ、こどもたちの声に耳を傾け続けた保護者・支援者そして当事者としての教員の変わることのない姿勢にあると思われます。特にその象徴ともいうべき活動が、子どもたちが遊びの中で発展させてきた「こども会議」で、ここからは多様なプロジェクトが生れています。これは2017年から文部科学省が進めている教育改革のモデルともいうべき活動で、今まさに教育界のテーマとなっている“主体的で対話的な深い学び”を先取りした実践と考えられるのではないのでしょうか。

自由な教育の場づくりという困難な道のりを超えてこられた学園の方々次ぎにどのような高みを目指してステップを刻まれるのか、その期待感を含めて活動賞として評価したいと思います。

（神谷明宏）

《活動奨励賞》

三國隆子（東京立正短期大学）

「商店街の可能性を開く 子育て力・親育て力・地域育て力」

東京都杉並区和田商店街では子育てグループ「わだっち」と商店が一緒になって「住みたいまちづくり」に取り組んでいる活動です。“子育て世代を取り込む“というコンセプトのもとに企画されるさまざまな取り組みはユニークで、「第12回東京と商店街グランプリ」の受賞（2016年）や「はばたく商店街30選」への選定（2017年）など注目を集めている活動です。

特に今回の応募に際しては、同地域の保育士を養成する大学との協定締結によって、学生とのコラボレーションでイベントを企画・運営する活動についても紹介されています。単なるゼミ活動や研究者の調査研究活動ではなく、「地域と子育て」という授業の設置や商店街での学生主体による企画の実施を通して、学生の継続的な地域貢献活動を実現している点が評価できます。将来保育士となる学生たちにとって、子どもや子育て世帯にとって暮らしやすいまちについて、商店街の住民と共に考える機会は貴重な体験となっています。商店街への地域貢献が端緒となり、大学が地域に開かれて、若者の学びが豊かになっている点は他地域の商店街や地域貢献に力を入れる大学も学ぶところが大きいあり、こうした点を高く評価し、活動奨励賞として選定をいたしました。

（吉永真理）

《活動奨励賞》

清水日香里（酪農学園大学）

「学生主体による大学不在地域における地域連携型実践的環境教育」

北海道のなかでも酪農・畜産が特色の地場産業の地域で長年、継続して環境キャンプを通しての「学び」を子どもたちに提供し、さらに学生自身の学びにつながっている活動です。地域上流の湖や周辺農地からの流出する環境因子の影響などに関して大学研究室が実施してきた研究の一部を自治体の産業振興課ならびに教育委員会と協働している「実践型」の環境教育を地域の子どもたちと共に実践している取り組みで、北海道で多く実施されている一過性の「体験型」の環境教育と一線を画しています。

大学や専門学校などの高等教育機関不在地域での地場産業にかかわる諸問題に地域の子ども達と生態学や環境学の視点からの診断し、科学的根拠に基づいた実践的な活動を取り入れた「環境キャンプ」やジュニアガイドアカデミーの展開など、「未来へのタネ」をまく地道な活動ですが、この実践は次世代育成を視野に入れた取り組みとなっており、ある程度の成果を得ているといえます。さらに学生さんが自分たちよりも下の世代に環境教育を展開することにより、学生さんの学びが深まり、子ど

も達と何度も活動を繰り返すことにより社会人になって求められる能力が身についていく実践で、キャリア教育の側面があることも評価し、活動奨励賞として選定いたしました。

(小澤紀美子)

こども環境・自治体施策賞

<総評>

「こども環境自治体施策賞」は、行政による優良な施策を顕彰することで、当該施策のさらなる発展と、他の自治体におけるこども環境改善施策の活発化を期するものです。

今年度 候補となった施策は、子どもが楽しくのびのび遊ぶという共通点を持ちながら、地域の自然・歴史・社会の状況の下で必要・的確なそれぞれ独自の施策を構築・実施しているもので、いずれもが顕彰に値するものと評価いたしました。

こども環境に関わる多様な主体の中で、自治体は自らが持つ用地・施設・組織・資金を活用して行動することも、教育・福祉・医療・まちづくり・環境等に関わる企業や団体を支援あるいは協働して活動を強化することも、自らの理念・行動を示すことで、こども環境に関わる地域の住民・コミュニティ・様々な組織の意識を高め、行動を変容させることも可能なポジションと大きな力を持っています。

今年度の受賞施策はその可能性を示し、こども環境に関わる様々な分野における創意あふれる施策の拡がりを予感させるものです。会員諸氏の推薦により優良なこども環境施策が続々と登場し、こども環境の改善に貢献することを期待しています。

(自治体施策賞選考委員長 宮本照嗣)

<<自治体施策賞>>

長野県

「信州型自然保育（信州やまほいく）認定制度」

本認定制度は、豊かな自然環境や多様な地域資源を活用し、自然保育を広く普及していこうという長野県の取り組みである。県が独自に定めた基準を満たすことにより自然保育に取り組む団体を認定していくのであるが、明確な基準が設けられているので、何を指せばいいのか分かりやすい。そして、自然保育に特化した団体を対象とした「特化型」に加え、一般の団体でも取り組みやすいような「普及型」を設定しているため、どの団体でも取り組める。人材育成、情報発信、運営支援と各方面でのサポートも充実しており、今後の安定した運営も見込める。さらに、鳥取県、広島県とも連携し、「森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク」を設立し、日本全国でのネットワークづくりへも広がっている。このような県内外に渡っての広いネットワークづくりは、自治体の強みをいかした波及効果の高い優れた取り組みといえるであろう。今後のさらなる発展はもちろんのこと、自治体同士のネットワークを活用した交流など今後の新たな展開も期待できる。

(高木 真人)

<<自治体施策奨励賞>>

岩見沢市（北海道）

「あそびの広場を核とした「えみふる」の子育て支援とソーシャルワーク・システム」

本活動は、積雪が多いため冬期に外遊びが出来にくい寒冷地域において、企業が撤退した中心市街地にある空き商業施設にパブリックな屋内遊び場を整備すると共に、保護者が悩む子育ての課題に多面的に対応する取り組みである。子育てに保護者は多様な悩みを感じている。特に、こどもの発育の遅れや発達障害による症状に保護者は悩むものの、医療機関にすぐに相談に行くことに躊躇する。

「えみふる」には保育士、臨床心理士、言語聴覚士などの様々な職種が準備され、子育てに支援が必要な状況にあるにもかかわらず支援に繋がりにくい家庭とこどもの課題に応えることの出来る総合的で柔軟な仕組みである。これまでに年間 600 件以上の案件に対応してきた。子育ての悩みを持つ家族がこどもを遊ばせる機会を契機に、こどもの発達の問題や発達障害を客観的に早期に評価し、その後の適切な支援に結びつけることの出来るしくみを構築し、実績をあげて来たことを高く評価し、奨励賞にふさわしい活動と判断する。

(五十嵐 隆)

《自治体施策奨励賞》

秩父別町（北海道）

「こどもの遊び場づくりの大胆な展開」

道央北部の秩父別町の人口は 2,400 人余りで、ここ 5 年の年間出生数は平均 15 人。人口減少と高齢化に打つ手はないと、あきらめかけていた秩父別町が打ち出したのは、子どもが思いっきり遊べる大型の遊び場。

「子どもは遊ばせないとだめだ」との信念から決断したもので、2017 年 4 月には道内最大級のネット遊具がある屋内の遊び場「キッズスクエアちっくる」を、2018 年 7 月には屋外の遊び場「キュービックコネクション」を設置した。

2 つの遊び場の整備費は 10 億円に上ったが、町外の子育て世代を多く呼び込むことに成功し、キャンプ場、温泉施設、飲食店にも活気をもたらした。そして 34 年ぶりの人口増加という信じられない成果を見事に形にした。

少子高齢化に悩む地方都市が、特色ある子ども施策を展開することによって人口減少を克服して地域活性化を成し遂げる可能性を示した意義深い先進的な取り組みと評価することができる。

(中島興世)